
僕は誰かと下を見て

rouge

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は誰かと下を見て

【Nコード】

N6351D

【作者名】

rouge

【あらすじ】

私たちの住んでいるのは下界。そんな下界を見下ろす渡と誰か。私たちの住んでいる世界全体を見たときに、雲の上から見下ろすかどうかのように映るのかを語っています。

あらすじ

この話は雲の上のお話です。

僕、雲河くものかわ 渡とわたる

雲の上の、渡と誰かの何気ない会話は

下界、つまり私たちの住んでいる地上について語っています。

地球を雲の上から見下ろすと、どのように見えるのでしょうか？

美しく見えるのか、はたまた醜く見えるのか。

みなさんも雲の上から一緒にご覧になってはいかがでしょうか？

憲法、法律、落とし穴

僕は下を眺めている。

「君には下の世界がどう映るかね？」

誰かに話しかけられる。

「意味が分からないね。」

「私の質問に対してかな？」

「いや、そうじゃないよ。下界の意味が分からないと言ってるんだ。」

「どうして？」

「僕にはすごく細かなところまで見える。きっとあなたもそうでしょう？。」

「勿論です。」

「人間は細かなところまで見る事ができない。でも、細かなところを作り出していく。」

「そうですね。＜警察＞とか言う、人々を取り締まる機関がさぞ困っていることでしょう。」

「あなたはインターネットというものをご存知ですか？」

「あれは、非常に興味深いですよ。」

「人はなぜ、憲法やら法律やらを作ったのか分かります？」

「この世が成り立っていないからですね。」

「はい。僕もそう思っていました。インターネットというものをしている人間を観察しているとよく分かりました。」

「ほう。何を知ったのですか？」

「ほら、ちょうどあの見苦しいデブが見えますか？」

「はい、見苦しいですね。萌え〜とか言ってますよ。」

「あの人は色んなインターネットの使い方を知っています。例えば、動画を見たり、情報を手に入れたり、漫画を読んだりね。」

「それは違法というものではないのですか？」

「もちろん引つかかってくるものもあるでしょう。しかし、人間は細かいところまで見ることはできないんですね。たかが1人のデブがそんなことをしたところで誰にも気づかれません。」

「確かにそのとおりです。」

「あのデブがそのような違法行為をしたとしたら、正当に生きている人は馬鹿馬鹿しくなる。なぜだか分かりますか？」

「そんなもの簡単ですよ。高い金を払って娯楽を手に入れている自分がいるのに、インターネットを使えばなんでも手に入る。無料ですね。」

「はい。そこでトラブルが生じます。それだつたらオレも、僕も、私もと、みんながみんな手を出し始める。さすがにそんなに人が増えたらあのデブはく警察」というものにはれて捕まります。」

「それは見苦しいとはいえ、哀れですね。」

「それをみんながやらない理由はただ一つです。」

「憲法や法律で縛られているんですね。」

「そのおかげでこの世は成り立っています。高い金を出して娯楽を手に入れるからお金が循環していく。しかし、それと同時に憲法や法律はあのデブを含め、その同類を守っているのです。」

「細かいところに逃げているから見つからないというわけですか。」

「憲法や法律は自分で自分の首を絞めているのですね。」

「かといってあのようなデブになつてはいけません。ほら見てください。」

「おやおや。猫のような耳を頭につけて、腰を振って踊り始めましたよ。」

「彼も彼でインターネットにのめり込み過ぎたせいで、自分で自分の首を絞めてしまったんですね。」

「吐き気がしてきます。」

「はい。そんなことをして喜んでいるデブを見て、意味が分からなくなっただです。」

憲法、法律、落とし穴（後書き）

今回は渡に世の中は醜く映ってしまいましたね。

いえ、決してこの作品はデブを馬鹿にしているわけではないのでご了承ください。

言葉の表裏

僕は下を眺めている。

「君には下の世界がどう映るかね？」

誰かに話しかけられる。

「汚いね。特に中身が。」

「そうかね？私には美しく見えるのだが。」

「どんなに美しく見えてもそれは見掛けだけでしょう。」

「見掛けだけ、とは言ってもやはり美しいものは美しいですよ。」

「あの山ですか？」

「はい。美しいですね。緑から赤へ、赤から黄へ、そして消えていく。なんと果敢無く、心魅了されるものでしょうか。」

「確かに。しかし、そんなきれいな自然を壊す人間の心が汚いと言っているですよ。」

「壊していくのも事実ですが、直そうと努めているのも事実ではないでしょうか？」

「結局は自分たち人間が助かればいいと思っているに違いありませんよ。」

「どういう意味ですか？」

「今まで散々、地球を汚し、放置しておいた人間が、なぜ今更地球をきれいにしようとするのでしょうかね。」

「地球温暖化によって海面が上昇し、地上が無くなる恐れがあるからですよ。」

「あなたも分かっているじゃないですか。結局、可愛いのは自分なんですよ。守ろうとしているのは、一見地球の環境というように見えますが、実は自分たちなんですよ。」

「つまり、地球の環境がきれいになることは結果であって、目的ではない、ということですね。」

「そのとおりです。」

「それにしても自分たちを可愛いと思ってないのか、地球の環境を守ろうとする上辺のキャッチフレーズに参加しない人たちは、私には少々理解しがたいですね。」

「何を言っているのですか？参加しない人たちはただの馬鹿ですよ。」

「なぜです？」

「環境を守ろうという言葉が上辺だけ、ということをつかかっていないからです。」

「なるほど。あの人たちには地球の環境を守ろうと言っている人たちが、本気で地球の環境を守ろうとしている人たちに見えるのですね。」

「中にはそういう人たちもいるでしょう。しかし、大半の人たちは「誰が特にもならないのに非営利で働くかよ。」と思っているに違いありません。」

「かわいそうな人たちですね。」

「他人事ではありませんよ。僕たちも、海面が上昇して地上がなくなってしまうては、日頃の楽しみがなくなってしまうではないですか。」

「それは嫌ですね。それでは私たちも地球の環境を守るのに協力しますか。」

「まず手始めに、あのデブが触っているPCの電源を切ってあげましょう。電力の削減です。」

「それはいい考えですね。しかし、PCだけが消えたら不自然なので、家のブレーカーを落としましょう。」

「ふふつ。あのデブ、急に腰を振るのをやめましたね。体がプルプル震えてきましたよ。」

「なんと。大声で奥方を怒鳴っているではありませんか。」

「聞こえてくる限りでは、「せっかくいいところだったのに！今度メイド喫茶連れて行ってくれないと許さない！」と言っていますね。」

「

「それは怒っているのでしょうか？ いまいち理解不能ですね。」

「まあなんにせよ、これで少しは地球にやさしくなったことでしょう。」

「そして、私たちの目にも優しいので一石二鳥ですよ。」

言葉の表裏（後書き）

今回は渡にこの世は汚く映ってしまいましたね。

地球の環境はみんな考えていくことが必要ですね。

また、決してこの作品はデブを馬鹿にしているわけではないのでご了承ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6351d/>

僕は誰かと下を見て

2010年11月9日05時39分発行